小澤重男先生を偲ぶ

『元朝秘史』研究に小澤重男名誉教授が果たした寄与[1]

― 小澤重男先生の思い出に代えて ―

The Contribution Made by Professor Emeritus Shigeo Ozawa to a Study of "The Secret History of the Mongols" :

Instead of the Memories of Shigeo Ozawa Bagsh

エルデネ・プレブジャブ
（モンゴル科学アカデミー言語文学研究所）
Erdene PUREVJAV
（Institute of Language and Literature, Mongolian Academy of Sciences）

東京外国語大学名誉教授、モンゴル国科学アカデミー外国人会員、国際モンゴル学会名誉会長、文学博士の小澤重男先生は、『元朝秘史』研究に自身の創造的な生涯と尽きることのない厖大な労力と努力をすべて捧げてきた偉大な学者である。先生は1926年8月18日に東京の中心地神田で生まれた。1951年3月に東京大学文学部言語学科を卒業し、同年4月から東京外国語大学蒙古学科〔1961年からモンゴル学科、1964年からモンゴル語学科と改称〕に奉職し、研究活動の大いなる旅路を断固として歩みはじめた。

小澤重男先生は1978年、「中世蒙古語諸形態の研究」という学位請求論文により、東洋大学から文学博士号を取得し、1982年7月から1983年5月までちょうど10か月間、すなわち300日間にわたって、英国のリーズ大学のウルグンゲ・オノン教授といっしょに、12巻本『元朝秘史』の原文を丹念に読み直したことにより、この文献を言語学の面から詳細に研究した訳註書を上梓しようと決意したという。

小澤重男先生は1985年5月に日本モンゴル学会会長に就任した〔在任期間は2001年5月まで〕。さらに1986年3月に内モンゴル大学名誉教授、1989年5月に東京外国語大学名誉教授の称号をそれぞれ授与され、1989年7月に日本国外務大臣表彰を受賞した。1990年7月にモンゴル国科学アカデミー外国人会員に選出され、1992年8月にモンゴル国立大学名誉教授の称号を授与された。小澤先生はトルコのアンカラ大学、英国のリーズ大学、米国のインディアナ大学にモンゴル語学およびアルタイ言語学の客員教授として招聘されたこともある。1990年8月に国際モンゴル学会会長代行、1992

[1] 本稿はЭ.Пүрэвжав, ""Монголын нууц товчоон" судлалд профессор Шигэо Озава багшийн оруулсан хувь нэмэр", *Японы боловсролын тогтолцооны уламжлал, шинэчлэл*, Уб., 2011, х.45-83. を改編したものである。

年8月に国際モンゴル学会会長に選出され、2011年8月まで長期にわたって在任し多大の成果を上げた。この間、2005年4月には日本国天皇の「瑞宝中綬章」を受章している。

その「謎」が完全には解明されていない『元朝秘史』研究の面で10数冊の優れた著作を出版した小澤先生は、『元朝秘史全釈』という6巻本の基礎研究の浩瀚な著作を1984年から1989年にわたって出版した。『元朝秘史全釈』（上）（1984年）という第1巻には『元朝秘史』第1~68節が、『元朝秘史全釈』（中）（1985年）という第2巻には『元朝秘史』第69~126節が、『元朝秘史全釈』（下）（1986年）という第3巻には『元朝秘史』第127~169節が、『元朝秘史全釈続攷』（上）（1987年）という第4巻には『元朝秘史』第170~197節が、『元朝秘史全釈続攷』（中）（1988年）という第5巻には『元朝秘史』第198~229節が、『元朝秘史全釈続攷』（下）（1989年）という第6巻には『元朝秘史』第230~282節がそれぞれ収録されている。小澤先生はこの研究で、『元朝秘史』の全文を漢字傍訳、漢字音写モンゴル語原文、ローマ字転写、日本語傍訳の順に横書きに並べて併記し、節ごとに意訳するとともに、各巻の最後に『元朝秘史』の原文を13～14世紀のウイグル式モンゴル文字で復元（第1巻はパスパ文字で復元）したことにより、古代および中世のモンゴル語の特徴を比較研究するのに重要な基準となる興味深い資料[2]となりえたのである。小澤先生は1950年代に『Altan Tobci（黄金の史綴研究）（1）』（1954年）、『Altan Tobci（黄金の史綴研究）（2）』（1959年）という2巻本の比較校訂本を出版し、1960～70年代には『元朝秘史』研究に関係する数十編の学術論文を執筆し発表した。これら一連の論文が『元朝秘史全釈』全6巻の形式、構成、品質に肯定的な影響を及ぼしたことはまちがいない。

小澤重男先生は1984年に出版した『元朝秘史全釈』（上）の「はしがき」に、「私が東京外事専門学校の蒙古語科に入学したのは昭和19年〔1944年〕のことだから、モンゴル語を勉強し始めて丁度今年で40年目になる。この40年の間、私のモンゴル語研究の殆どの時間は、モンゴル語辞典の編纂と元朝秘史モンゴル語の研究に向けられたと言うことが出来る。その過程の中で、私は“私なりの元朝秘史の訳註を書いて見たい”と思い始めた。それは、もう今から十年以上も前のことになろう。その頃から私は、私の奉職する東京外国語大学で元朝秘史モンゴル語講読の講義を始め、現在まですでに十年以上の連続講義となっている」と記している。その一方で、1989年に出版した『元朝秘史全釈続攷』（下）の「はしがき」では、「本書『元朝秘史全釈（上・中・下）、仝続攷（上・中・下）』の六冊は、筆者のモンゴル語研究における、ささやかながらも、一つの記念碑と呼ばせていただけるものと思う。〔中略〕憶えば、本訳註業に従事した六年間は、誠に苦しい日々の連続であった。しかし、その苦しみを楽しみ得た日々でもあった。〔中略〕сүүлийн тэмээний ачаа《最後の駱駝の荷物》は確かにхүнд《重か》ったが、なんとか筆者は、その《荷物》をбуулгах《下す》ことができた」[3]と述懐している。

小澤重男先生は、長年の専門研究で培った観察眼と蓄積した経験に基づき、1980年代初めから『元朝秘史全釈』という6巻本の基礎研究の著作を発表しはじめたが、この著作は単に『元朝秘史』研究のみならず、中世モンゴル語研究、さらにはモンゴル語歴史文法、モンゴル語原典資料研究に大いなる貢献をした意義のある業績である。小澤先生の出版した『元朝秘史全釈』という6巻本の大著は、

2　Д.Төмөртогоо, “Хэл судлагч（Ш.Озава）”, *Үнэн*, № 183（16773）, 1987.VIII.1.

3　Н.Уртнаст, *Япон дахь “Монголын нууц товчоон” судлал*, Хөххот, 2013, х.264.〔小沢重男『元朝秘史全釈』（上）、風間書房、東京、1984年、2頁。小沢重男『元朝秘史全釈続攷』（下）、風間書房、東京、1989年、1-2頁。〕

『元朝秘史』モンゴル語研究の大百科辞典にほかならない。その後1997年、この学術的な詳細な訳註書は2巻本の簡易版に再構成され、日本の一般読者向けに岩波書店から〔文庫として〕出版された。

小澤重男先生が『元朝秘史』研究の面で著わした最高峰の業績の一つが『元朝秘史蒙古語文法講義』という3巻本の労作である。第1巻は1993年、第2巻は2000年、第3巻は2005年に出版された。この基礎研究の著作では、『元朝秘史』モンゴル語研究を質的にまったく新しい段階に引き上げ、特に中世モンゴル語の構造と体系の研究に主たる関心を向けるとともに、『元朝秘史』研究について書いた過去の重要な諸論文の精華が付録として収められている。さらにまた、研究上の新しい方法論に基づいて作成された『元朝秘史蒙古語辞典』が1993年出版の第1巻に付録として収められている。

小澤重男先生が『元朝秘史』研究の面で書いた実用的にきわめて意義のある著作の一つが、1994年に岩波書店から〔新書として〕出版された『元朝秘史』である。本書は、内モンゴル大学のボルジギン・バヤルメンド教授によって現代モンゴル語に翻訳され、『元朝秘史の世界』という書名で1998年にフフホト（モンゴル文字）で、2002年にウランバートル（キリル文字）で出版された。小澤先生は本書の「まえがき」で、「この小著の中で私は50年近く続けてきた『秘史』研究の主要な核となる成果を中心にまとめ上げた」[4]と強調している。また「この書の最大の価値は、小沢氏が自らの考えの筋道を全てさらけ出していること」[5]にあるという。

小澤重男先生がきわめて的確に結論づけているように、「わが国〔＝日本〕の元朝秘史学は、このように世界的に見て最高水準にあると言える」[6]のである。「元朝秘史学」に日本の各時代のモンゴル学者が傑出した貢献をしてきたということをここで特に強調しておきたい。日本語の翻訳にはみなそれ自身の独特の色合いや特徴があるだけでなく、『元朝秘史』の原文の意味を完璧に理解するのに貢献した、あるいは貢献しつつあるものばかりである。結論を述べれば、第1に、現代日本語はモンゴル語と文法構造と語順の面できわめて似通っており、第2に、13世紀のいくつかの漢字の書き方や字形が現代日本語においてもほとんど変わらずにそのまま用いられていることなどが、「元朝秘史学」において日本のモンゴル学者が傑出した成果を上げるのに具体的な影響を与えたことも疑いない。小澤先生も言及しているように、「『元朝秘史』という文献は学べば学ぶほどに、次から次へと研究課題が湧出する“汲めども盡きざる泉”の如き」[7]重要な意義をもつ「千古の大典」にほかならない。

日本の東洋史学者の那珂通世（1851～1908）が1907年1月、『成吉思汗実録』という、詳細な解説と註釈のついた精確な訳註書を発表したことにより、『元朝秘史』の最初の日本語訳が出版されたという歴史がある。日本語とモンゴル語の文法構造や語順が同じであることをきわめて明晰に活用し、文を上から下に向かって一語ずつ対訳し、漢語の傍訳も考慮しながら翻訳したこの訳註書は、日本のモンゴル研究の最初の礎石を敷いてくれたと見なすことができる。小澤先生が6巻本の『元朝秘

4　Ш.Озава, *Монголын нууц товчооны ертөнц*, Орчуулсан Б.Баярмэнд, Уб., 2002, х.2.〔この部分は原著にはなく、モンゴル語訳の「まえがき」にのみある。〕

5　中村雅之「小澤重男著『元朝秘史』（岩波新書）を読む」『KOTONOHA』、第81号、古代文字資料館、東京、2009年8月、1頁。

6　小沢重男『元朝秘史全釈』（上）、風間書房、東京、1984年、1頁。

7　小澤重男『元朝秘史蒙古語文法講義 続講』、風間書房、東京、2000年、1頁。

史全釈』を著わしているときに、「那珂通世博士の『成吉思汗実録』の偉大さを知った」[8]と強調しているのは、思いがけないことではないであろう。

小澤重男先生は、『元朝秘史』モンゴル語研究の分野において、「元朝秘史蒙古語に於ける副動詞語尾 -run について」(1952年)、「元朝秘史蒙古語に於ける副動詞語尾 -ru について」(1953年)、「元朝秘史蒙古語研究 (3) -u-'ai- について」(1954年)、「元朝秘史蒙古語の動詞語尾—特に -bi と -ligi / -li'i について—」(1955年)、「元朝秘史蒙古語研究 (5) 」(1956年)、「元朝秘史蒙古語研究 (6) —動詞語尾 -la'ai / -le'ai について—」(1960年)、「元朝秘史蒙古語研究 (7) — ulu / ese について—」(1960年)、「元朝秘史蒙古語に於ける副動詞語尾 -ru について」(1960年)、「元朝秘史蒙古語研究 (8) — qunan について—」(1961年)、「元朝秘史蒙古語の oro'a goro'esün について」(1972年)、「元朝秘史モンゴル語に於けるいわゆる dative-locative について」(1976年)、「元朝秘史モンゴル語と現代モンゴル語」(1977年)、「元朝秘史モンゴル語に於ける oki について」(1977年)、「元朝秘史モンゴル語の undurun について」(1988年)、「元朝秘史モンゴル語探求二題」(1989年)、「元朝秘史書名考」(1989年)、「元朝秘史巻頭の一文」(1990年)、「元朝秘史とは」(1992年)、「元朝秘史原文における -bai についての覚書」(1996年) などの研究論文を書いて発表した。中世モンゴル語の文法形式を深く研究し、その構造と体系を解明することは、モンゴル語の文法規則とその本質を確実に研究するのに特に意義がある。

小澤重男先生は、モンゴル国の首都ウランバートルで1959～2002年に開催された8回にわたる国際モンゴル学者会議にすべて出席し、研究発表と討論を行ってきた。小澤先生は、数十年にわたって、モンゴル研究における新しい世代の育成に労力を捧げてきた長老学者の一人である。先生の弟子たちは現在、堅実で優れた研究業績を上げ、世界のモンゴル研究者の中で適切な地位を占めていることを特に指摘しておきたい。小澤先生は、1959年開催の第1回国際モンゴル学者会議から2002年開催の第8回国際モンゴル学者会議まで欠席することなくすべて参加し、ほぼすべての会議で、『元朝秘史』モンゴル語研究に関係する新しい見識を提示した興味深い発表をモンゴル語あるいは英語で行ってきた。蛇足ながら、小澤先生のように、8回にわたる国際モンゴル学者会議にすべて参加してきた内外のモンゴル学者はほとんどいないと言ってもよい。

小澤重男先生は、1959年9月初旬に開催された第1回国際モンゴル学者会議に出席し、「秘史のいくつかの動詞接尾辞について」という研究発表をモンゴル語で行った。この発表で、「古いモンゴル語、たとえば13～15世紀のモンゴル語では、"-bi, -ligi, -jigi, -i" という4つの接尾辞は、それぞれ "-luγa, -joγa, -u" という接尾辞の女性形であり、これらの接尾辞は、男性を示す接尾辞であるのか、女性を示す接尾辞であるのかという点に違いがあったのではないかと考えています」[9]と結論づけた。先生は後に発表した「国際モンゴル学者会議に出席して」という講演記録の中で、「実際に見るモンゴルは持合せの知識とは大分違っていました。少くとも現在のモンゴルは遊牧生活という形態から脱皮して一つの共同組合を単位とする定着放牧という段階になっています。〔中略〕〔私たちは〕モンゴ

---

8 Ш.Озава, *Монголын нууц товчооны ертөнц*, Орчуулсан Б.Баярмэнд, Уб., 2002, х.190.〔小澤重男『元朝秘史』、岩波書店、東京、1994年、243頁。〕

9 Ш.Озава, "Нууц товчооны үйл үгийн зарим дагаврын тухай", *Олон улсын монгол хэл бичгийн эрдэмтний анхдугаар их хурал*, I дэвтэр, Эмхэтгэсэн Ж.Цолоо, Редактор Ц.Дамдинсүрэн, Уб., 1962, х.205.

ル語で発表したわけですが、それが彼等に非常に受けて日本の代表は評判が良かったのです。〔中略〕モンゴル人は酒がとても好きで酒に弱い私は非常に困りました。と云うのは農村に行きますと馬乳や牛乳から作った酒を家に入る度に勧められることで〔した。〕〔中略〕モンゴル人は思想的な面では寛大でこれが共産主義国家かと思われる程のんびりしていて私たちにとって住みよい国です」[10]と、初めて訪れたモンゴルの印象を詳しく述べている。また、日本のモンゴル学者の坂本是忠氏も1959年の第1回国際モンゴル学者会議に出席し、「日本におけるモンゴル研究」という発表を行い、「小澤さんは服部〔四郎〕先生の弟子で、現在、私といっしょに東京外国語大学に教員として勤務しています。小澤さんは戦後教員となり、私たちの中では最も若いが、『黄金史（アルタン・トブチ）』と『元朝秘史』に関する書籍や論文を書いています。小澤さんは古典モンゴル語の専門家です」[11]と、今から50年以上も前に述べていたことをここに記しておきたい。

小澤重男先生は、1970年9月初旬に開催された第2回国際モンゴル学者会議に出席し、“On the Adding Order of the Mongolian Verbal Suffix”という研究発表を英語で行い、古典モンゴル語の実例として、『元朝秘史』モンゴル語に広範に使用されていた動詞の“-lγa / -lge”という添加形態素について特に言及し論じた。

小澤重男先生は、1976年8月下旬に開催された第3回国際モンゴル学者会議に出席し、「『元朝秘史』における“oki”という語について」という研究発表をモンゴル語で行い、『元朝秘史』モンゴル語における不定の“-н”をもつ多数の語が現代モンゴル語では常に“-н”をもつ語になったことに注目していると述べ、「時代も定かではない太古のモンゴル語には母音で終わる名詞の語幹には2種類あったようです。1つは“-н”のない語幹、もう1つは“-н”のある語幹です。これらを見ると、“-н”のある語幹は《コンテクスト》の中で既知の明確なオブジェクト（対象）を指し、“-н”のない語幹は当該の《コンテクスト》の中で未知の不明確なオブジェクト（対象）を指すという微妙な符合があったようです」[12]という非常に興味深い新しい見解を提示した。これは言語の深層構造の研究に直接関係する理論上の研究である。小澤先生は、第3回国際モンゴル学者会議の活動内容について、「世界モンゴル学者会議」という彙報を1977年の『東洋学報』（第58巻）に発表している。

小澤重男先生は、1982年8月に開催された第4回国際モンゴル学者会議に出席し、「モンゴル語と日本語の関係」という研究発表を行い、「モンゴル語と日本語の間に起源的な関係があるのかないのかという問題は、長年の間、私の頭から離れない問題であり、現在までその答えは見つかっていません。私の考えによれば、日本語がアルタイ諸語を構成する一つの言語だと見なすのは、現段階では時期尚早です。日本語がアルタイ語族に含まれることを現在まで誰も証明していません。私の考

---

10 Ш.Озава, “Олон улсын монголч эрдэмтдийн хуралд оролцсон нь”, Орчуулсан П.Соёлмаа, *Олон улсын монголч эрдэмтний анхдугаар их хурлын тухай тэмдэглэл, дурсамж*, Эмхэтгэсэн Э.Пүрэвжав, Редактор Ш.Бира, Уб., 2009, х.62.〔小沢重男「国際モンゴル学者会議に出席して」『語学研究所所報』、第1号、東京外国語大学語学研究所、東京、1960年3月、26-30頁。この講演記録の末尾には「本稿は昭和34年11月4日、本研究所が主催した公開講演の要旨である」と記されている。〕

11 К.Сакамото, “Япон дахь монголын судлал”, *Олон улсын монгол хэл бичгийн эрдэмтний анхдугаар их хурал*, IV дэвтэр, Уб., 1962, х.56.

12 Ш.Озава, ““Монголын нууц товчоон” дахь “oki” гэдэг үгийн тухай”, *Олон улсын монголч эрдэмтний III их хурал*, II боть, Уб., 1977, х.116.

えでは、日本語がアルタイ語族の一派であると証明される可能性はそれほど高くはありませんが、それほど低くもないと言えます」[13]と指摘している。小澤先生はまさにこの頃から、モンゴル語と日本語の関係についての煩雑な研究を後回しにして、『元朝秘史』モンゴル語の研究に向かって、一貫した姿勢と不退転の決意をもって取り組むことになったようだ。先生は第4回国際モンゴル学者会議の閉会の辞として、「私は1959年にウランバートルで開催された第1回国際モンゴル学者会議に出席するため初めてモンゴルを訪れました。その時から20年以上が経過し、私はこれまで11回モンゴルを訪問しました。その間に何回か開催された国際モンゴル学者会議には欠かさず出席してきました。したがって、私はモンゴルとモンゴル研究のここ20年あまりの飛躍的な発展を実際にこの目で見てきた人間なのです。ウランバートルは世界のモンゴル研究の主要な中心地となり、国際モンゴル学者会議は、世界のモンゴル研究者が出会い、お互いに面識を得て、意見交換をする演壇となりました。今後ともウランバートルが国際モンゴル研究の主要な中心地であり続けるだけでなく、さらに多くの国の多くの研究者をモンゴル研究に誘導する中心地になると私は信じています。日本の東京と大阪の両外国語大学にモンゴル語学科が創設されてから60～70年になり、この間、モンゴル語学科を数百名の人が卒業しました。日本では現在、同時に120名の学生と10数名の大学院生がモンゴルの言語、歴史、文化を研究しています。モンゴルの言語、歴史、文化について学んでいる学生数において、わが国はモンゴル人民共和国に次いで世界第2位となっています。次回の第5回国際モンゴル学者会議にさらなる成果を携えて再会できることを衷心より祈念いたします」[14]と述べている。

小澤重男先生は、1987年9月中旬に開催された第5回国際モンゴル学者会議に出席し、“The System of the Indicative Endings in the Language of “The Secret History of the Mongols”” という興味深い研究発表を英語で行い、『元朝秘史』モンゴル語における動詞の女性形を表示する添加形態素[15]の痕跡が明確にあることを、文体上の色合いの微妙な差異を考慮に入れながら、図表にまとめて提示した。小澤先生は、日本の新聞に寄稿した印象記の中で、「第5回大会の開かれた本年は、日本とモンゴル人民共和国との間に外交関係の樹立された1972年から15年目に当たり、この学会にとっても、また、外交関係の点から見ても、一つの節目を迎えたとの感を覚える。私は、最初の大会から今回の第5回大会まで、幸いなことに、そのすべてに出席し、その間、世界の多くのモンゴル学者と接し、交流を深めつつ、世界的に見ればマイナーな、しかしユニークな、この学問領域の生成発展を眺め来った、数少ない人間の一人と言うことが出来ようか」[16]と記している。蛇足ながら、私事ではあるが、モンゴル労働組合文化中央会館で1987年秋に開催された第5回国際モンゴル学者会議に初めて参加して研究発表を行ったとき、私は小澤先生と初めてお会いし面識を得たのである。

小澤重男先生は、1992年8月中旬に開催された第6回国際モンゴル学者会議に出席し、「中世モンゴル語の方言について」という研究発表を行い、中世の東部方言を代表する文字資料である『元朝

---

13 Ш.Озава, “Монгол, япон хэлний холбоо”, *Олон улсын монголч эрдэмтний IV их хурал*, II боть, Уб., 1985, х.418.

14 Ш.Озава, “Хэлсэн үг”, *Олон улсын монголч эрдэмтний IV их хурал*, III боть, Уб., 1986, х.55.

15 Ш.Озава, “The System of the Indicative Endings in the Language of “The Secret History of the Mongols””, *Олон улсын монголч эрдэмтний V их хурал*, II боть, Уб., 1992, х.335.

16 Ш.Озава, “Монгол эмнэлэгт（манай орны тухай гадаадын хэвлэлд）”, Япон хэлнээс орчуулсан Н.Бадамханд, *Үнэн*, № 136（17039）, 1988.VI.7.〔小沢重男「モンゴルの病棟で」『読売新聞』（夕刊）、1987年11月11日。〕

秘史』と西部方言を代表する文字資料である『ムカディマット・アル・アダブ』という辞典にある具体例に基づき、「中世モンゴル語の東部方言は、母音“u - ü”をもつ語中にある2つの母音の間に子音“-h- < -g-”をもつ方言ですが、西部方言は、母音“i”をもつ語中にある2つの母音の間に子音“-b-”をもつ方言なのです」[17]という研究上の斬新な見解を発表した。小澤先生は、第6回国際モンゴル学者会議の活動内容について、「モンゴル高原の国際学術大会」という彙報を1998年の『學鐙』（第95巻・第12号）に発表している。

小澤重男先生は、1997年8月中旬にチンギス・ホテルで開催された第7回国際モンゴル学者会議に出席し、“Comparative Study of Language of “The Secret History of the Mongols” and “Lu. Altan Tobči”” という研究発表を行った。小澤先生は、開会の辞の中で、「第7回国際モンゴル学者会議の開会式にあたり、吉祥と福徳に満ちた出会いを迎え、無上の喜びを感じています。私たちはみな今日、モンゴルの美しい国土に爽やかな夏が訪れ、人びとが平穏に暮らし、家畜の群れが肥え太り、穀物が収穫を迎えようとしている、静かな黄金の秋のこの美しき日に、定例の会議を開催するため、世界各地から集まっています。研究者のみなさまのご意見とご研究の成果が、モンゴルの現在の発展のプロセスを前進させるために、科学上の貴重な貢献をされるであろうということを、私は深く信じてやみません」[18]と述べている。

小澤重男先生は、2002年8月中旬に開催された第8回国際モンゴル学者会議に出席し、自身の基本的な研究領域である「秘史の“aji’ai”について」という研究発表を行い、大多数のモンゴル学者に、この“aji’ai”という形式が、これまで“aju’u”の女性形であると解釈されてきたことに疑問を抱いていると述べ、『元朝秘史』モンゴル語を詳細に検討してみると、中世モンゴル語の動詞の過去時制の接尾辞は、男性語および単数語には“-ba^2, -ju’u^2, -la’a^2, -lu’a^2”、複数語および尊敬語には“-bai^2, -ju’ui^2, -la’ai^2, -lu’ai^2”、女性語には“-bi,（-ji’ai）, -li’i（-liyi）, -ligi”[19]という接尾辞を接続するモンゴル語文法の規範体系があったことを、具体的な例に基づいて解説した。

小澤重男先生は、モンゴル国の歴史家Ts.ドルジスレン、Kh.ペルレー、内モンゴルの学者ナムジルツェヴェーン、ハスドルジ、バヤル、イェケミンガダイ・イリンチンらの書いた『元朝秘史』研究に関する興味深いテーマを取り上げた優れた論文を日本語に翻訳した。小澤先生の生誕80周年を記念して、国際モンゴル学会から『モンゴル研究論集』[20]が2006年にウランバートルで出版された。『元朝秘史』をモンゴル言語学の観点から深く掘り下げて研究し、多くの学術書や論文を著わした日本のモンゴル学者の一人が小澤先生だった。先生はまた、自身の研究において、わが国の学者がモンゴル言語学の分野で著わした主要な著作にも注意を払い、きわめて奥行きの深い基礎研究を行った[21]研究者だった。小澤先生は、『元朝秘史』研究の分野において、6巻本『元朝秘史全釈』、3巻本『元朝秘史蒙古語文法講義』、簡易2巻本『元朝秘史』など全部で20点ちかくの学術専著、著書、訳註書、60編あまりの学術論文を発表してきた。

---

17 Ш.Озава, “Дундад зууны монгол хэлний нутгийн аялгууны тухай”, *Mongolica*, Vol. 6（27）, Уб., 1995, х.45.

18 Озава Шигэо, “Монголч эрдэмтдийн VII их хурлыг нээж хэлсэн үг”, *Mongolica*, Vol. 9（30）, Уб., 1999, х.12.

19 Ш.Озава, “Нууц товчооны “aji’ai”-ийн тухай”, *Mongolica*, Vol. 14（35）, Уб., 2004, х.153.

20 *Монгол судлалын өгүүллийн түүвэр*, Эмхтгэгч Э.Пүрэвжав, Редактор Ш.Бира, Уб., 2006, 266 х.

21 Б.Сэржав, ““Монголын нууц товчоо”-г Японд судалсан тоймоос”, *Mongolica*, Vol. 1（22）, Уб., 1990, х.290.

『元朝秘史』モンゴル語研究を質的にまったく新しい段階にまで高め、特に、中世モンゴル語の構造と体系の研究を創始するにあたって、実用的かつ学術的に意義のある多くの優れた著作を書いて発表したところに、小澤重男先生の決して忘れることのできない永遠の功績が存するのである。先生は、モンゴル研究において、『元朝秘史』モンゴル語研究という新しい研究領域の最初の確固たる標石を敷いてくれたのである。先生の長年にわたる刻苦勉励と創造的な努力の具体的な成果として出版された、モンゴルの「9」という数のもつ象徴性を考慮に入れて9巻本で出版された『元朝秘史』の基礎研究の大著は、モンゴル研究の将来の様相と方向を明確化するのに決定的な意義があると言えよう。

参考文献

那珂通世譯注『成吉思汗実録』(全)、筑摩書房、東京、1943年、633頁。

中村雅之「小澤重男著『元朝秘史』(岩波新書)を読む」『KOTONOHA』、第81号、古代文字資料館、東京、2009年8月、1-4頁。

Озава Шигэо, “Нууц товчооны үйл үгийн зарим дагаврын тухай”, *Олон улсын монгол хэл бичгийн эрдэмтний анхдугаар их хурал*, I дэвтэр, Эмхэтгэсэн Ж.Цолоо, Редактор Ц.Дамдинсүрэн, Уб., 1962, х.204-209.

Ozawa Shigeo, “On the Adding Order of the Mongolian Verbal Suffix”, *Олон улсын монголч эрдэмтний II их хурал*”, I боть, Уб., 1973, х.339-346.

Озава Шигэо, ““Монголын нууц товчоон” дахь “oki” гэдэг үгийн тухай”, *Олон улсын монголч эрдэмтний III их хурал*, II боть, Уб., 1977, х.112-116.

小沢重男「世界モンゴル学者会議」『東洋学報』、第58巻、財団法人東洋文庫、東京、1977年、167-173頁。

小沢重男『元朝秘史全釈』(上)、風間書房、東京、1984年、503頁。

Озава Шигэо, “Хэлсэн үг”, *Олон улсын монголч эрдэмтний IV их хурал*, III боть, Уб., 1986, х.55-58.

Озава Шигэо, “Монгол эмнэлэгт (манай орны тухай гадаадын хэвлэлд) ”, Япон хэлнээс орчуулсан Н.Бадамханд, *Үнэн*, № 136 (17039), 1988.VI.7.〔小沢重男「モンゴルの病棟で」『読売新聞』(夕刊)、1987年11月11日。〕

Ozawa Shigeo, “The System of the Indicative Endings in the Language of “Secret History of the Mongols””, *Олон улсын монголч эрдэмтний V их хурал*, II боть, Уб., 1992, х.335-336.

小澤重男『元朝秘史蒙古語文法講義』「附元朝秘史蒙古語辞典」、風間書房、東京、1993年、649頁。

小澤重男『元朝秘史』、岩波書店(新書)、東京、1994年、259頁。

Озава Шигэо, “Дундад зууны монгол хэлний нутгийн аялгууны тухай”, *Mongolica*, Vol.6 (27), Уб., 1995, х.44-45.

小澤重男訳『元朝秘史』(上)(下)、岩波書店(文庫)、東京、1997年、317頁、340頁。

小澤重男「モンゴル高原の国際学術大会」『學鐙』、第95巻・第12号、丸善株式会社、東京、1998年12月、20-23頁。

Озава Шигэо, “Монголч эрдэмтдийн VII их хурлыг нээж хэлсэн үг”, *Mongolica*, Vol. 9 (30), Уб., 1999, х.11-12.

小澤重男『元朝秘史蒙古語文法講義 続講』、風間書房、東京、2000年、527頁。

Озава Шигэо, *Монголын нууц товчооны ертөнц*, Орчуулсан Б.Баярмэнд, Уб., 2002, 199 х.

Озава Шигэо, “Нууц товчооны “aji’ai”-ийн тухай”, *Mongolica*, Vol.14 (35), Уб., 2004, х.151-154.

Озава Шигэо, “Олон улсын монголч эрдэмтдийн хуралд оролцсон нь”, Орчуулсан П.Соёлмаа, *Олон улсын монголч эрдэмтний анхдугаар их хурлын тухай тэмдэглэл, дурсамж*, Эмхэтгэсэн Э.Пүрэвжав, Редактор Ш.Бира, Уб., 2009, х.59-63.〔小沢重男「国際モンゴル学者会議に出席して」『語学研究所所報』、第1号、東京外国語大学語学研究所、東京、1960年3月、26-30頁。〕

Э.Пүрэвжав, “Профессор Шигэо Озавагийн товч намтар”, *Монгол судлалын өгүүллийн түүвэр*, Эмхэтгэгч Э.Пүрэвжав, Редактор Ш.Бира, Уб., 2006, х.7-8.

Э.Пүрэвжав, “Профессор Шигэо Озавагийн эрдэм шинжилгээний бүтээлийн жагсаалт”, *Монгол судлалын өгүүллийн түүвэр*, Эмхэтгэгч Э.Пүрэвжав, Редактор Ш.Бира, Уб., 2006, х.9-15.

Э.Пүрэвжав, ““Монголын нууц товчоон”-ы япон орчуулга”, *Монголын нууц товчоон зохиолын гадаад орчуулгын асуудалд*, Уб., 2006, х 46-50.

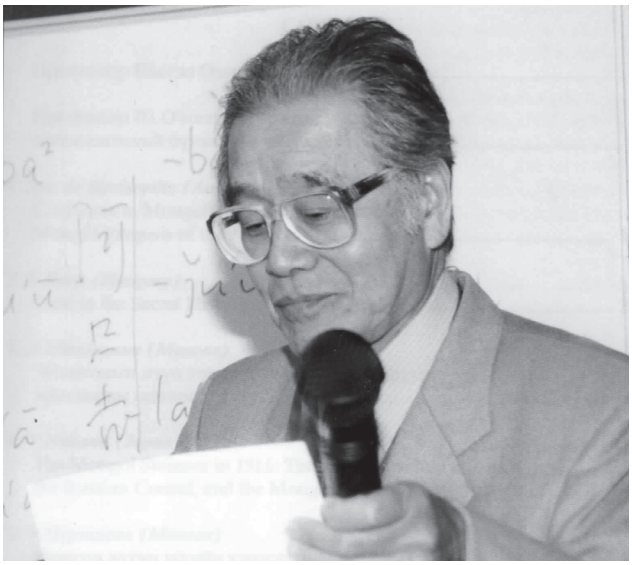
Э.Пүрэвжав, ““Монголын нууц товчоон” судлалд профессор Шигэо Озава багшийн оруулсан хувь нэмэр”, *Японы боловсролын тогтолцооны уламжлал, шинэчлэл*, Уб., 2011, х.45-83.

К.Сакамото, “Япон дахь монголын судлал”, О*лон улсын монгол хэл бичгийн эрдэмтний анхдугаар их хурал*, IV дэвтэр, Уб., 1962, х.55-59.

Б.Сэржав, ““Монголын нууц товчоо”-г Японд судалсан тоймоос”, *Mongolica*, Vol.1（22）, Уб., 1990, х.283-293.

Д.Төмөртогоо, “Хэл судлагч（Ш.Озава）”, *Үнэн*, № 183（16773）, 1987.VIII.1.

Н.Уртнаст, *Япон дахь “Монголын нууц товчоон” судлал*, Хөххот, 2013, 341 х.



2002年8月ウランバートルで開催された
第8回国際モンゴル学者会議で研究発表される小澤重男先生
（*Монгол судлалын өгүүллийн түүвэр*, Эмхэтгэгч Э.Пүрэвжав, Редактор Ш.Бира, Уб., 2006. 所収の写真を転載）

（訳文責：岡田和行。〔　〕内は訳者による補足あるいは説明である。）